



笑学研究所の思い出 ～去るにあたって～

笑学研究所前所長 井上 宏

追手門学院大学に、我が国初めての「笑学研究所」が設立されて、1年と半年が経ちました。所長として1年、特別顧問として半年の間、お世話になりました。私の仕事は、研究所の基礎を築いてルールを敷くことでした。スタート時は、私を含めて所員5名、特別顧問1人の合計6人のスタッフでしたが、翌年には所員1名が加わり、3名の客員研究員の参加も得ることができました。

アツという間の短い時間でしたが、私にとっては、大きな思い出が残りました。1994年に「日本笑い学会」を設立してから以降、私は大学に「笑い学」の研究所ができないものかと期待していました。それが追手門学院大学で実現し、その初代所長に招かれたのですから、私にとっては誠に光栄なことであり、大きな喜びでありました。

研究所のスタートは、2015年10月1日ですが、その構想については、大学50周年記念事業の一環でもあり、周到に準備は進んでいたと思います。私が大学側のスタッフとお会いした最初は2014年の9月のことでした。それ以来、何度かお会いし、坂井東洋男学長とも話を交わさせていただきました。学長のお話の中で、「ユーモアのある人間を育てたい」という強い言葉がありました。その手始めが「笑学研究所」の設立なのだといいことでした。全国数ある大学で「笑学」の必要性を説かれた学長は、おそらく坂井学長が初めてではないかと思ひ共感を覚えました。

所長を引き受けるには、年を取りすぎていること、自宅が遠方であることなど、辞退する選択もあったのですが、学長の教育理念に共感し、私のこれまでの知識と経験が役立つものならばと、初代所長を引き受けることにしました。

研究所のスタートは、準備段階で、事務局が大変だったわけですが、所員の任命や設立の記者会見、設立記念シンポジウムや第1回公開講座の開催など、立て続けに仕事が山積していました。事務局の皆様には、大変お世話になり、あらためてお礼を申し上げる次第です。

2015年の記者会見には、追手門学院大学のキャラクターと通天閣の「ビリケンさん」の着ぐるみの登場があって、型破りの記者会見になったのではないかと思います。大勢の記者会見場は、会見によくある緊張というよりも、和らいだ空気に満たされ、和やかな記者会見となりました。

年が明けて2016年の1月4日、大学50周年事業の一環としての「新聞全面広告」が出ました。私はこの新聞広告に驚き且つ賞賛の念を禁じえませんでした。事前に「ビリケンさん」を「笑学研究所名誉所長」にしたいという意向を伺ってはいましたが、私は新聞コピーを見ていなかったもので、どういう意味なのか判然としないうでしたが、新聞を見て、こういうことだったのかと納得

しました。そして同時に「これはすごい！」と驚嘆せざるをえませんでした。

「笑学研究所名誉所長にビリケン就任！」というコピーもさりながら、メインコピーの「大阪に幸あれ、笑いあれ。ずっと大阪 50 年。追手門学院大学」の言葉は、大阪人の心に響いたと思います。「大阪に幸あれ、笑いあれ」の一言が優れものでした。ビリケンさんの「名誉所長」も納得でした。

2016年2月29日、第1回公開講座が開催されました。私が講師をつとめ、笑学研究所の第1回目で、どんなことが語られるのかという興味も手伝ったと思われませんが、定員を越えての申込があってお断りをするという事態も起こりました。嬉しい悲鳴でした。

4月に入って、授業で初めての「笑学入門」がスタートしました。大学の初めての講義科目で、どれだけの学生が履修してくれるのか、という心配がありましたが、蓋を開けてみると、定員を遥かにオーバーする履修届が出て、抽選によって履修生を決めなければならないという、これまた嬉しい悲鳴を聞くことになりました。「笑学」についての物珍しさもあったと思いますが、開講に寄せた学生たちの新鮮な想いを大事にしなければと思った次第です。「笑学」への期待は大きいのだということ、研究所員一同、認識を新たにすることがあると感じました。

「笑学研究」は、幅広く言えば、「人間学」の一つで、一つの専門領域でカバー出来るものではなく、まさに総合的な研究が要請される学問と言えます。研究スタッフも、そう言う意味で、多様な領域の研究者が集まっており、「笑いとユーモア」という鉱脈を探索し、錯綜する鉱脈のつながりとその核心を探っていただけたらと願っています。

研究所は、その研究成果を出す必要があります。それは講義であり、講演であり論文でありするわけですが、研究所としては、それらを論文化し出版し、内外に発表しなければなりません。私は折ある毎に、所員の皆さんに「論文を！」と言い続けていました。まずは「論文を溜めよう」ということは、共通の目標になったと思います。

いよいよこれから本腰を入れてという時に、研究所を去るのは、とても残念な気もしますが、高齢の身では、助走がついたこの段階で、若い研究者の方々にバトンタッチするのが賢明な判断ではないかと考えました。

坂井学長をはじめ、研究所の先生方、事務方の皆さんに大変お世話になりました。短い期間ではありましたが、充実した時間を過ごさせていただいたことに深く感謝申し上げる次第です。

2017年3月31日